

【研究発表⑥】

阿部 亘「幸田露伴と『新論語』—その編纂および経解をめぐって」

幸田露伴（一八六七～一九四七）は日本近代文学に大きな足跡を残した小説家であるとともに、漢学に通じた作家としても知られる。とりわけ元曲や道教の紹介は先駆的な業績として名高い。露伴は幼少の頃より儒教を学び、その晩年に至るまで深い愛着を持ち続けた。木下杢太郎は、晩年の露伴を「孔夫子の使徒」と評する。その伝記を執筆した塩谷賛は露伴は三度にわたって『論語』を注釈したと述べている。その最初のもは、明治四三年（一九一〇）に発表された「為政篇」および「八佾篇」の注解である。ついで大正四年（一九一五）には学而篇首章への解説などを含む『悦楽』が出版され、最後のものは昭和一三年（一九三八）、文部省教育学局の委嘱で書かれた『一貫章義』である。

前述の「為政篇」・「八佾篇」注解は、成功雑誌社刊行の『新論語』に発表されたものである。この『新論語』は島田三郎、三宅雪嶺、幸田露伴、遠藤隆吉、小柳司氣太、松村介石、前田慧雲、戸田安宅、南條文雄、高津柏樹、児島献吉郎という十一人の著者による分担執筆によるもので、大隈重信の序が付されている。その執筆者の多くは、明治四一年（一九〇八）に発足した孔子教会のメンバーであった。また、そこには明治末期に盛行した「修養書」の書き手も含まれている。露伴は孔子教会の創設にこそ関与していなかったようだが、人脈におけるつながりもあり、また同時代的な関心がある程度共有していたものとみられる。

本発表では、孔子教会を中心とした人々による『新論語』編纂の時代背景および編纂過程を述べるとともに、同書における露伴経解の特質を彼ののちの『論語』注解との比較などから検討する。